

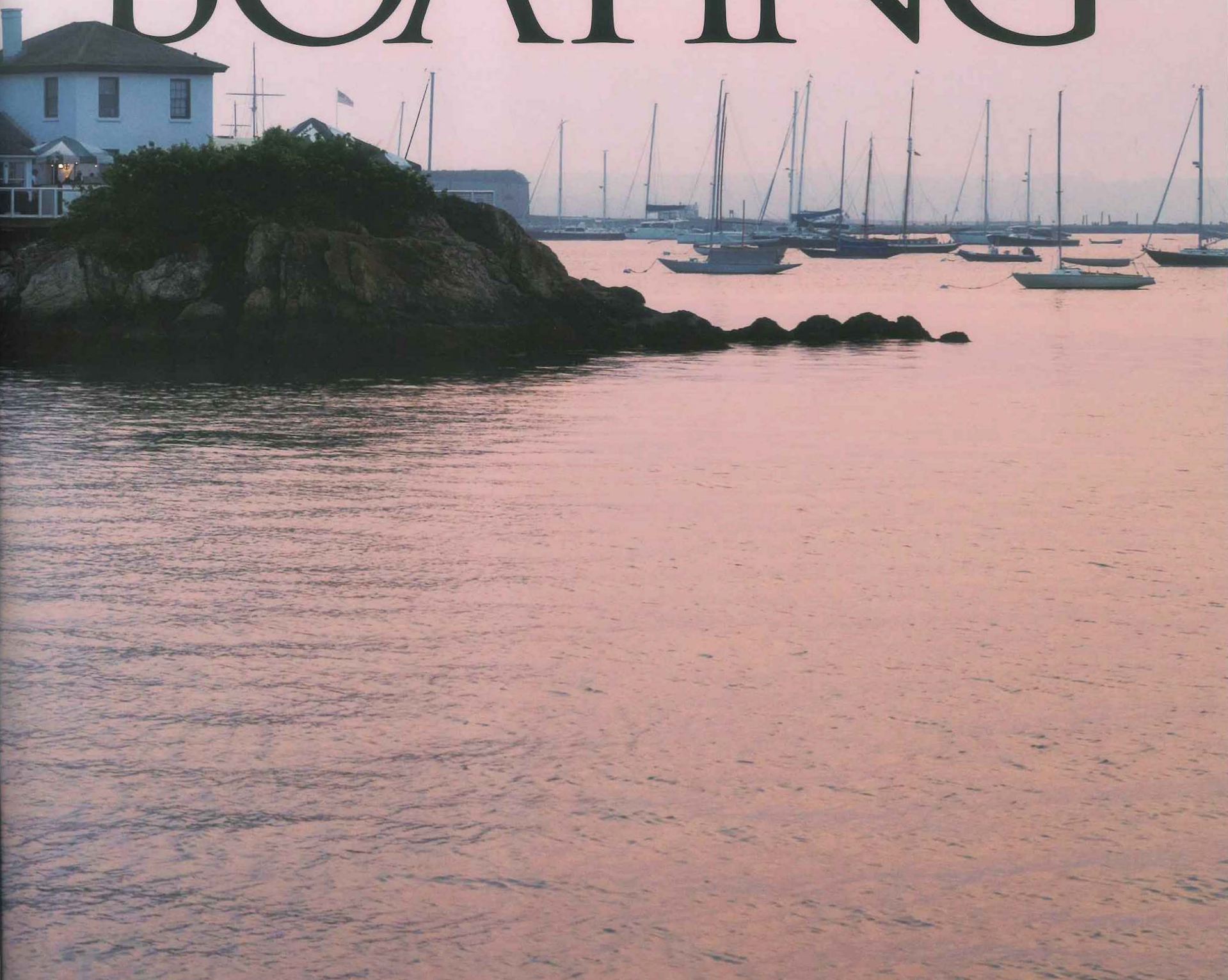
THE MAGAZINE FOR SOPHISTICATED BOATING & SAILING LIFE

プレミアム・ボートینگ

KAZI MOOK
VOL.

07

Premium
BOATING



PHOTOGRAPHIC JOURNEY

TO THE WORLD'S YACHT HAVENS.

SWAN 48

BREATH OF NEXT GENERATION

進化を遂げた王道モデルが
日本の海で羽ばたく

伝説的なモデルがひしめく、スワンのミッドレンジ。中でも「48」は、特別な位置を占める。最新モデルであり、3代目となるスワン48は、現代的な進化を遂げたモデルだった。

文=永井 潤 写真=矢部洋一
text by Jun Nagai, photos by Yoichi Yabe





最近ステムの丸いデザインが出てきているが、このシャープなエントリーは、波切りだけでいえば抵抗は少ないだろう

2016年は、ナウターズスワン社の創立50周年だった。そのタイミングに合わせて発表されたのが、ワンデザインの「クラブスワン50」。そして新時代のスワン入門艇としての「スワン54」だった。

近年のスワンは、80や115などに見られるように、大型化だけでなく、デザインの現代化が進んでいた。“現代化”というのは、例えば外見的なものに限れば、直立ステム、バウスプリット、絞られない幅広いスターン、ツイングラダーといったものだ。そのような中でスワンのエントリーモデルには、古くか

らのファンも納得する品質、性能、そしてルックスが必要だったはずだ。

その54は、確かにかつてのスワンを強く感じさせるもので、ステムとトランサムは傾斜し、スターンは絞られ、シングルラダーを採用。ドッグハウスは低く、特徴あるグラフィックの入ったウエッジシェイプと柔らかな曲面の広いルーフを持ち、重厚な走りと合わせて、「これがスワンだ」といった、安心感のあるポートだった。

そして2019年、「スワン48」が発表された。こちらは一転して、最近のスワンの流れを汲んだ現代的なポートとなった。これによって、54と48という、テイストの違う2艇の選択肢が生まれたわけである。

48~55フィートのミッドレンジは、スワンにとって重要な位置を占め、歴史的なモデルがひしめいているが、ここでは48フィートに話を限ろう。

最初の48はS&Sのデザインで、1971年にリリースされた。スワン独特のウエッジシェイプのドッグハウスを導入したモデルで、性能もすばらしく、当時の最高峰のレースであるアドミラルズカップ出場艇にも選ばれ、5年間で46隻が建造された。

2代目の48は1995年にデビューし、57隻が建造された。もちろん初代48もクルージングにも適したものだったが、新しく起用されたジャーマン・フレール(German Frers)によるスワン48も、レース成績だけでなく、高いクルージング適性も評価されていく。

そして、初代の登場から40年という年月を経ての3代目48。ユーザーの多大な支持を集めた先代2艇の後を継ぐモデルとして、現代的な設計建造技術の恩恵をフルに受けている。スワンの雰囲気を残すモデルとなっている。

*

全長は14.78メートル、ステムは直立に近いが、少しスターンオーバーハングがあって、水線長は13.88メートル。全幅は4.59メートル、軽荷排水量は15トンとなっている。クラシックタイプの54と比べて、水線長や幅はわずかに小さいが、排水量長さ比や帆装係数は1割近く大きな値となっている。

バウスプリットやツイングラダー、そして高めのフリーボードを持ち、おそらく一見では、現代風のよくあるポートにしか見えないかもしれない。しかし、わずかに反りのあるシアライン、ステム周りの形状のまとめ方、現在では



デッキ上はフラットでクリーン。スプレーフードはコーチルーフのリセスに格納され、左下の写真にその後端部が見える。コーチルーフにはサンベッドが置け、チークを張ることもできる。サイドステイがわずかにガンネルより内側に入っているのは、外観的なものだろうか

THE LITTLE BIG SWAN

新たな魅力を放つ 現代版ナウターズスワン

現在では長めといつていいスターンオーバーハングを持ち、ビルジの張っていないトランサムとの組み合わせには、どこぞでエレガントな感じを受ける。風上側の窓や、それ以外の細かい





長めといっいいスターンオーバーハング、そしてウエッジシェイプのドッグハウスなどには、まぎれもなくスワンのテイストが感じられる。

また、スプレードの格納スペースが付いた広大なコーチルーフや、シンプルなコクピットの造形は、54から受け継いだものだ。そして、トランサムロッカーにテnderを格納できたりするのは、スターンの絞られた54では不可能だったことである。

艤装は、さらに進化している。主なコントロール系統は両舷のステアリングホイール

前にリードされ、シートロッカーもあって、さらに整理された形だ。メインのシーティングはコクピットテーブル後端から取られており、トラベラーを省略して油圧によるバンクシーティングを前提としている。大型艇ではあまり見かけることのないものだ。

船内は3キャビン構成。ポートサイズの割にシンプルなレイアウトにするのは、54から引き継いだ形で、船内のゆったり感はさらに増している。なお、アフトキャビンのパース配置に特徴があり、左舷はダブル/シン



ジブトラックはコーチルーフ上にあり、ジブの引き込み角度は十分に鋭角だ。バックステイやフームバングの油圧も強力で、利きが良い



ステップを下りたところの動線のスペースが広い。左舷セーラーには、センターシートもセットできる。試乗艇の木工はスタンダードだが、異なる色調も選べる



上: フォアキャビン。パースには、航海中に実用的な仕切り板をセットしている。アイランドタイプではなく、Vパースとすることも可能だ

下: 右舷側アフトキャビンはツインの設定。左舷側はシングルまたはダブルとなる。天井高があるのが現代的なデザインの特徴だ

高さを起因とするものだ。

試乗に移ろう。フレールのデザインしたポートは、ヒールするとヘルムはやや重めになるが、ラダーのエリアが大きく、最後までしっかり利く感覚がある。48も同じような感じを受けたが、ツインラダーのおかげで、ヘルム、利きとも向上している。

どんなポートも波があると走りにくいものだが、この48は(排水量に対する)長さどパワーがあるので問題となりにくい上に、波が少なくなると一気に艇速が上がる感じがある。これはデザイナーズコメントにあるように、Cp(プリズマティック係数)が高速向きの値であるせいだろう。強風では、豪快なジェネカークの走りが楽しめる。

フレールデザインらしくスタビリティーは十分にあり、パフォーマンスパッケージも用意される。まさに、大海原をどこまでも疾走していけそうなポートである。

グル、右舷はツイン。これは広いスターン幅のおかげだが、高さ方向に関しても、コクピットフロアの位置が高いために余裕が生まれている。そしてそれは、フリーボードの

SPECIFICATIONS

SWAN 48

- 全長:14.78m ○水線長:13.88m ○全幅:4.59m
- 喫水:2.40m ○排水量:15,000kg ○バラスト重量:5,200kg
- セール面積:メイン77.1m²、ジブ62.5m²、ジェネカー216.7m²
- 燃料搭載量:360L ○清水搭載量:500L
- エンジン:ボルボ・ベンタ D2-75(75PS/55kW)



問い合わせ:リビエリゾート
〒249-0008 神奈川県逗子市小坪5-23-9
TEL:0467-24-1000 <https://www.riviera.co.jp/marina/sales/>